

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 26 日現在

機関番号：64302

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23530209

研究課題名(和文) 徳川幕府の外交儀礼 近世アジア域内交流から幕末対欧米外交への連続性を中心に

研究課題名(英文) Diplomatic Protocol of the Tokugawa Shogunate: With a Focus on Continuity from Early Modern Inter-Asiatic Exchanges to late Edo Western Diplomacy

研究代表者

佐野 真由子 (SANO, MAYUKO)

国際日本文化研究センター・海外研究交流室・准教授

研究者番号：50410519

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円、(間接経費) 900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、幕末期、欧米諸国の外交官が将軍に拝謁した際の儀礼様式が、幕府の試行錯誤の中で整備された経緯を検証した。日本および諸外国の一次史料で事実関係を追跡するとともに、他の近世武家儀礼一般、また、料理、服飾等、文化史各要素の研究成果を取り入れて分析を進めた。

結果、安政4(1857)年から慶応3(1867)年までの範囲で展開した「幕末外交儀礼」の全体像を捉え、その式次第が、朝鮮通信使聘礼の伝統を土台に段階的に成立した過程を把握するに至った。これは、明治維新後、本格的な西洋化を見る以前の、見落とされてきた外交儀礼の実態であり、この前後にわたる日本外交の連続/断絶について再考を促すものである。

研究成果の概要(英文)：This project aimed at elucidating how the Tokugawa shogunate officials prepared the ceremonial protocol for the shogun to receive Western diplomats in the bakumatsu period. I looked into Japanese and foreign primary sources, and also referred to the existing studies on various rites of the samurai class as well as on different cultural elements of the time, such as cuisine and clothes, of which an official ceremony was composed.

I have reached to grasp the overall picture of the diplomatic protocol, valid between 1857 and 1867, which was developed step by step, in the beginning based on the Tokugawa shogunate's experiences of receiving Korean envoys. The diplomatic protocol of this decade had largely been overlooked in the academic studies, in spite of its importance as functioned prior to the Westernisation of diplomatic practices under the Meiji government. The results of this project would encourage reconsideration of continuity/discontinuity of broader Japanese diplomacy.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：政治学・外交史・国際関係史

キーワード：外交儀礼 徳川幕府 幕末 将軍拝謁 朝鮮通信使 欧米外交官 幕臣 経験の蓄積

## 1. 研究開始当初の背景

申請者は平成 18 年以来、幕末期に展開される対欧米外交の政策現場において、幕臣たちが、過去の朝鮮通信使迎撃に関する記録を前例として検証していた事実に注目していた。幕府の欧米諸国に対する外交行動を決めたのが、ゼロからの右往左往ではなく、近世を通じたアジア域内外交の経験の蓄積を土台とする、地に足のついた検討であったという認識、それが当時第一線にあった人物たちの具体的な行動から裏付けられたことは、「幕末」を「近世」から切り離された異質な時代と見るのではなく、「近世」の連続性の中で見直すという視角をもたらし、申請者の研究を大きく方向づけることになった。

そうした連続性を検証していくうえで、重要な舞台として浮かび上がったのが、外交儀礼の場面である。ここで述べる外交儀礼とは、国書の内容や書式といった紙面上の問題よりも、外交使節の登城と將軍拝謁を中心とした、一定の秩序を伴う人間の動き、それを包摂する時間、空間のあり方を想定したものである。本研究開始時においては、とくに平成 21-22 年度における科学研究費補助金プロジェクト(若手 B)「徳川外国の連続性—『近世』から『幕末』へ、幕臣筒井政憲に見る経験の蓄積に着目して」の成果として、安政 4(1857)年に西洋の外交使節として初めて登城し、13 代將軍家定に謁見した米国総領事ハリスの迎撃をめぐる幕府内での準備にあたり、担当の幕臣らが、朝鮮通信使の記録を紐解き、細かい検討を行った過程を、追跡し終えた段階であった。

その考察をさらに深め、徳川幕府による外交儀礼の実態についていっそう詳細な分析を行うとともに、そのことを通じ、冒頭にも述べた、幕末期までを含む近世国際関係の連続性という大きなテーマについて、より確固たる見解を得たいと考え、本研究に着手するに至った。

## 2. 研究の目的

本研究は、上欄にも触れたとおり、徳川幕府による外交儀礼の詳細に迫り、それを通して、近世を通じたアジア域内外交の経験が、幕末期に開始される欧米諸国を相手とした国際関係の土台となったことを、実

証的に示そうとしたものである。

最も直接には、幕末期、欧米諸国から来日する使節への幕府の対応が、朝鮮通信使迎撃時の慣例を原点として順次整えられていった経緯を検証し、明らかにする。また併せて、それらの儀礼に携わった幕閣・幕臣たちの世代を超えた人的系譜を掘り下げることにより、当時の政策実践の現場における外交認識の連続性を論証することを目標に掲げた。

## 3. 研究の方法

本研究は第一義的に、研究代表者個人による史料渉猟、閲読である。具体的な作業としては、東京大学史料編纂所編『幕末外国関係文書』を基本としつつ、国立公文書館内閣文庫蔵をはじめとする関係史料によって、登城当日やその前後の動きを再現し、また、式次第そのものや、各種の作法を定めていった幕臣たちの議論の過程を確認した。同時に、諸外国側記録によって日本側の情報を補完する作業を重視した。

なお、研究開始当初において以下の四課題を、調査遂行の全期間にわたり、とくに注意すべき点として設定した。

(1) 本研究以前の申請者の研究は、既述のとおり、幕末期の外交につながる土台としては朝鮮通信使儀礼を中心に据えて進めていた。近世の対外関係において対朝鮮外交が基軸であることに変わりはないが、これに加え、琉球使節や、外交の枠組みからは外れるものの、類似の検討対象でありうるオランダ商館長の事例をも幅広く組み込み、複合的な図式を把握するよう努めること。

(2) 外交儀礼の中心をなす登城・將軍拝謁については、当面、登退城の段取り(行列の態様や通過すべき城門、幕府側からの出迎いのあり方等)、將軍および出仕者の服飾、城内における狭義の拝謁式の次第、饗応の四要素に分けて分析を進めつつあったが、それら各要素について、当該各領域(服飾、食文化など)における研究の蓄積を十分に参照すること。

(3) 登城・將軍拝謁の当日は一連の儀礼の頂点をなす場面ではあるが、そこに至る、使節一行の江戸までの道中や、使節江戸滞在中の、幕府によるさまざまな環境整備、ま

た、高官から末端に至る幕臣らへの将軍からの褒美等まで含めて、全体像が成り立っていることは言うまでもない。それら登城・拝謁儀礼の外延部にも可能な限り視野を広げること。

(4) 外交儀礼はそれだけが独立領域として切り離されるものではなく、主に幕藩体制下の国内政治の観点から研究されてきた、幕府が執り行う広義の儀礼伝統の中に位置づけてみることで、個々の作法の意義等が明確化される場合の多いことが、報告者のそれまでの研究から判明していた。そうした側面を重視し、外交儀礼の各ケース、各側面を、幕府の一般的な儀礼慣行とも関連づけて解釈すること。

#### 4. 研究成果

(1) 初年度にあたる平成 23 年度はとくに、上欄に掲げた四課題のなかでも(2)を意識し、近世から幕末へと城中における使節迎接儀礼が引き継がれる過程を、儀礼の各要素に分解して詳細に検証した。とりわけ、他の要素に比べて報告者自身の研究が遅れていた「食」(饗応)にまつわる側面について主要な成果を得た。

(2) 平成 24 年度には、研究開始時点においてすでに詳細を把握していた、朝鮮通信使聘礼から、幕末の欧米外交官として将軍に拝謁した初発事例である、安政 4 (1857) 年の米総領事ハリス迎接儀礼への引き継ぎ経緯に続いて、蘭ドンケル=クルティウス、露プチャーチンの拝謁(以上安政 5 年) 再びのハリス登城(安政 6 年)とその再挙行(万延元年)を経て、英オールコック、仏ド=ベルクール(以上万延元年)へと、順次、前例に基づいて様式が整理され、ひいては当時の徳川幕府における外交儀礼の型が確立していく様子を、具体的に追跡した。これについては、日本側、諸外国側双方の史料を用いて実証的に経過を跡づけることを、とくに意識した。

(3) 最終年度は、上記(2)の経過をさらに追跡し、徳川幕府崩壊に至るまでの儀礼の展開に視野を広げるとともに、外交関係以外の他の近世武家儀礼一般の研究成果を取り入れつつ、これまでの調査結果を踏まえた全体にわたり、いっそう詳細な分析を行った。

(4) 総じて、既出の安政 4 年、米総領事ハリス

の登城に始まり、全 15 件(この数え方は各事例の位置づけ方によるため、現在、報告者自身の最終的な見解を模索中である)からなる「幕末外交儀礼」の全容を捉え、それらの様式が幕臣らの試行錯誤の中で連鎖的に整理されていった過程を捉えることができたと考えている。その入口は朝鮮通信使儀礼の伝統であったが、出口は、外交実務の引き継ぎとともに明治政府にバトンタッチされ、本格的な西洋化の道につながっていくという図式、ないし、長期的な国際関係史における「幕末外交儀礼」の位置を把握するに至った。

(5) 安政 4 年を初発事例として、慶応 3 (1867) 年まで展開する「幕末外交儀礼」は、従来の近世武家儀礼、あるいはより長期にわたる外交儀礼の研究において、完全に見落とされてきたものである。本研究は、儀礼研究の蓄積に欠けていた要素を埋めるものであることはもちろん、より大きな日本外交史の連続性を考えるうえで、一つの大きな鍵となるとの展望を明確にすることができた。これをさらに深化させた次の段階の研究として、平成 26 - 28 年の科学研究費補助金プロジェクト(基盤 C)「幕末外交儀礼の研究——欧米外交官による登城・将軍拝謁儀礼を中心として」を遂行する。

#### 5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計 7 件)

佐野 真由子、「持続可能な外交をめざして——幕末の外交儀礼をめぐる検討から」、日本研究、査読有、48 巻、2013 年、101 - 127 頁

佐野 真由子、「幕末 初代駐日英国公使オールコックの富士登山」、環——歴史・環境・文明、査読無、55 巻、2013 年、118 - 123 頁

佐野 真由子、「欧米外交官たちが見ていなかったもの - 幕末の外交儀礼から考える」、爽恢、査読無、26 巻、2013 年、3 - 3 頁

佐野 真由子、「東アジアの歴史をつくった人たち——研究雑感」爽恢、査読無、第 25 号、2012 年 3 頁

佐野 真由子、「東アジアの一大都市“Osaka”から考える」、漢陽大学日本額国際比較研究所・BK21 日本文化研究特性化チーム共同主催国際シンポジウム

「東アジア近代都市の空間の表象」資料集、査読無、2012年、7～9頁  
佐野 真由子、「ロンドン万博へ続く道——一八六〇（文久元）年のオールコックの旅と日本の『開国』」、明治聖徳記念学会紀要、査読無、復刊48巻、2011年、91～109頁  
佐野 真由子、「岩瀬忠震のいた時代——徳川の近代化を支えた人々」、爽恢、査読無、24巻、2011年、3～4頁

〔学会発表〕(計12件)

佐野 真由子、「幕末最終章の外交儀礼——徳川慶喜の外国公使引見について」、共同研究会「徳川社会と日本の近代化——17～19世紀における日本の文化状況と国際環境」、2014年2月15日、国際日本文化研究センター（京都市）  
Sano Mayuko、「Rutherford Alcock's Audience with the Shogun in 1860, and Problems implied」、第一回 EAJS (European Association for Japanese Studies) Japan Conference、2013年9月28日、京都大学（京都市）  
佐野 真由子、「坂本龍馬の元治元年」、歴史に学ぶ楽問塾（招待講演）、2012年9月29日、NPO 法人国際生涯学習文化センター（大阪市）  
佐野 真由子、「東アジアの一大都市“Osaka”から考える」、漢陽大学日本国際比較研究所・BK21 日本文化研究特性化チーム共同主催国際シンポジウム「東アジア近代都市の空間の表象」（招待講演）、2012年11月24日、漢陽大学（韓国・ソウル）  
佐野 真由子、「幕末の日本を変えた坂本龍馬」、NHKラジオ第2「文化講演会」（招待講演）、2012年12月30日、NHKラジオ第2  
佐野 真由子、「持続可能な外交へ——幕末期、欧米外交官の将軍拝謁儀礼から」、日文研共同研究会「徳川社会と日本の近代化——17～19世紀における日本の文化状況と国際環境」、2013年2月15日、国際日本文化研究センター（京都市）  
佐野 真由子、「近代外交への模索 - 幕末の外交儀礼から」、ブカレスト大学日本研究センター主催国際シンポジウム The Quest For Modernity in Japan、2013年3月2日、ブカレスト大学（ルーマニア・ブカレスト市）

Sano, Mayuko、「Rutherford Alcock's Japanese diplomacy and the 1862 London International Exhibition」、シンポジウム“Internationality on Display: Revisiting the 1862 International Exhibition”（招待講演）、2012年2月3日、ヴィクトリア・アンド・アルバート美術館（イギリス・ロンドン市）

佐野 真由子、「米国総領事館ハリスの将軍謁見と『対食』問題をめぐって」、日文研共同研究会「徳川社会と日本の近代化——17～19世紀における日本の文化状況と国際環境」、2011年12月11日、国際日本文化研究センター（京都市）

佐野 真由子、「岩瀬忠震と徳川の近代」、岩瀬忠震没後150周年記念講演（招待講演）、2011年7月18日、新城市設楽原歴史資料館（新城市）

佐野 真由子、「オールコックの江戸その」、高輪東禅寺開創400周年記念講演（招待講演）、2011年5月28日、高輪東禅寺（東京都港区）

佐野 真由子、「アメリカ使節の将軍拝謁儀礼をめぐる文化摩擦と交流——ハリス日記を中心に」、日文研共同研究会「日記の総合的研究」、2011年4月17日、国際日本文化研究センター（京都市）

〔図書〕(計3件)

上村敏文、笠谷和比古編、教文館、日本の近代化とプロテスタンティズム、2013年、440頁  
岩下哲典編、東京堂出版、江戸時代 来日外国人人名辞典、2011年、383頁  
笠谷和比古編、思文閣出版、一八世紀日本の文化状況と国際環境、2011年、568頁

〔その他〕

ホームページ等  
<http://research.nichibun.ac.jp/ja/researcher/staff/s015/index.html>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

佐野 真由子 (SANO Mayuko)  
国際日本文化研究センター・海外研究交流室・准教授  
研究者番号：50410519